

発話のしにくさに関する意識 や実態に関するアンケート調 査

北村 達也 (甲南大学)

能田 由紀子 (ATR-Promotions)

吐師 道子 (県立広島大学)

竹本 浩典 (千葉工業大学)

研究の背景

- 医学的に異常がなくてもコミュニケーションに不自由を感じている人が一定の割合で存在する (立川, 2013)
- 手先が器用でない人がいるのと同様に不思議なことではない
- 発話のしにくさ → プレゼン, 面接, QOL, 自己肯定感, etc.

先行研究

- 立川 (2013)
 - 県立広島大生151名を対象とした調査
 - 日常的に発話のしにくさを自覚する/どちらかといえば自覚する人：41.7 %
- 北村 (2014)
 - 甲南大生505名を対象とした調査
 - 文系学生の41%, 理系学生の52%がある程度以上話しにくさを感じると回答
 - 発話のしにくさを感じる人は聞き返されることが多いと感じている

調査対象の大学と学生を増やして、偏りの少ない知見を得る

方法

調査の対象

- 日本国内の大学，大学院の学部生，院生
 - 15大学
 - 日本語母語話者
 - 2,043名

愛知淑徳大学， 神奈川工科大学， 金沢工業大学， 県立広島大学， 高知大学， 甲南大学， 神戸大学， 札幌保健医療大学， 千葉工業大学， 東京国際大学， 東北工業大学， 筑波大学， 姫路獨協大学， 弘前学院大学， 北海道大学

調査の実施法

- 大学・大学院の講義やゼミでアンケートの冊子 (6ページ) を配布 → 回収
 - 注意事項を理解し，同意した方のみ回答
- 未成年者には保護者向けの文書を配布
- 無記名方式
- 倫理審査により承認
 - 甲南大学
 - 必要に応じて調査対象の大学でも審査

質問項目(要約版)

- 問1 情報機器を利用しているか？
- 問2 メールやSNSを利用しているか？
- 問3 メールやSNSの利用時間は？
- 問4 人と話しをするのが苦手か？
- 問5 早口か？
- 問6 声が大きいか？
- 問7 声が良いか？
- 問8 聞き返されることが多いか？
- 問9 発音がうまくいかないことがあるか？
- 問10 発音がうまくいかないときの感覚や状態は？

- 問11 発音がうまくいかない単語や音は？
- 問12 発音を改善したいか？
- 問13 性別は？
- 問14 年齢は？
- 問15 所属は？
- 問16 高校時代は文系か理系か？
- 問17 医師に言葉や聞こえの問題を指摘されたことがあるか？

問9

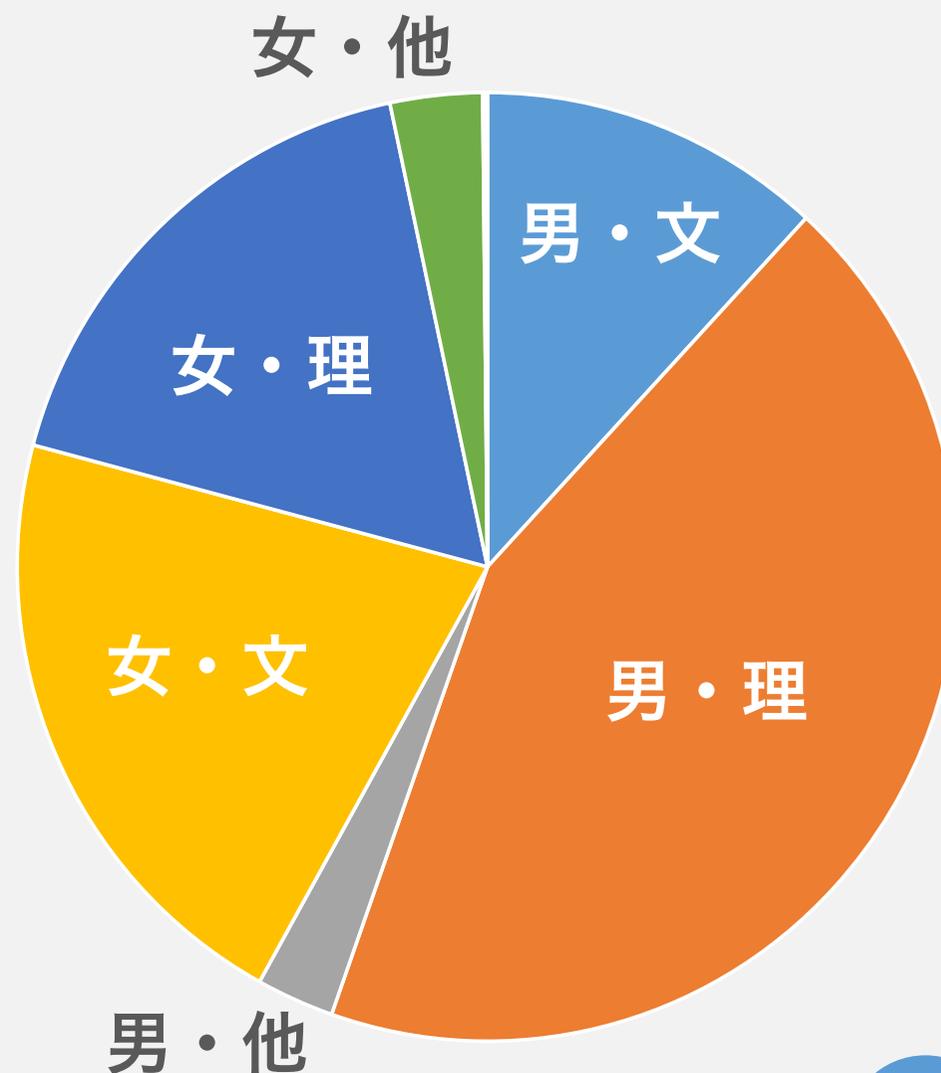
問9 あなたは、普段の会話で、発音がうまくいかないと感じることはありますか。ただし、人前であがってうまく話せないときなど、緊張によって発音がうまくいかないものは除きます。

- (1) ある
- (2) どちらかといえばある
- (3) どちらとも言えない・わからない
- (4) どちらかといえばない
- (5) ない

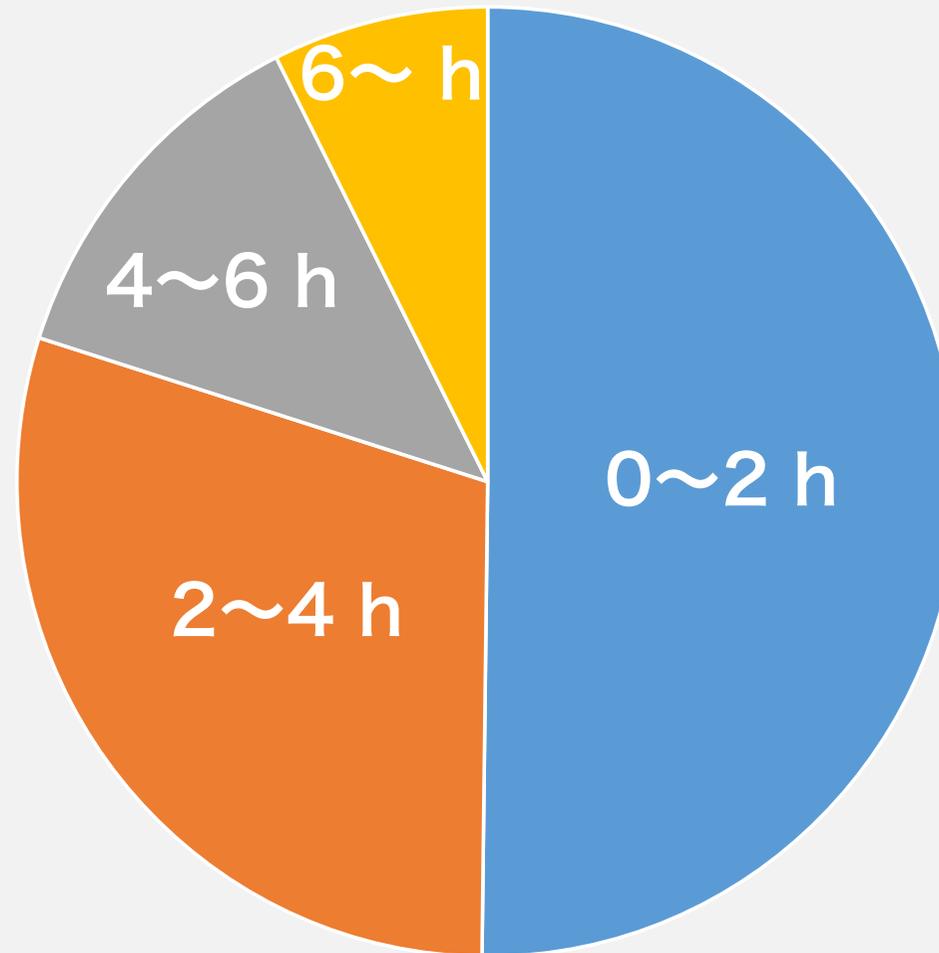
結果

回答者の内訳

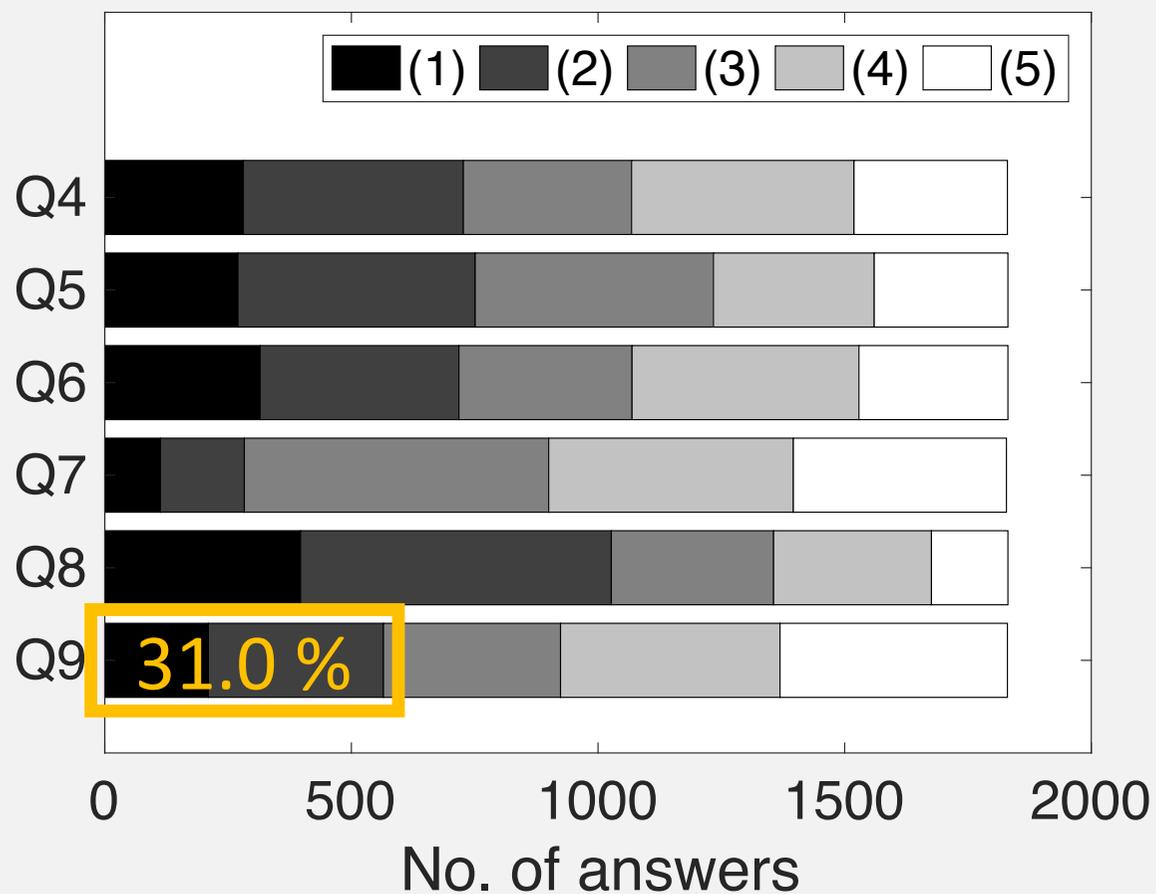
- 全回答数：2,043名
- 医師に言葉や聞こえに関する指摘を受けたことがない：1,831名
 - ある：67名, わからない：130名
- 年齢の平均値：19.5歳 (標準偏差1.6歳)



メール, SNSの利用時間



問4～9の結果



問4 人と話しをするのが苦手か？

問5 早口か？

問6 声大きいか？

問7 声が良いか？

問8 聞き返されることが多いか？

問9 発音がうまくいかないことがあるか？

(1) そう思う

(2) どちらかといえばそう思う

(3) どちらとも言えない・わからない

(4) どちらかといえばそうではないと思う

(5) そうではないと思う

発話のしにくさの自覚との相関

表3：問9の結果と問3～8の結果との間の相関係数

質問のペア	相関係数
問9—問3	0.06
問9—問4	0.23
問9—問5	0.16
問9—問6	-0.06
問9—問7	-0.16
問9—問8	0.48

- 問3 メールやSNSの利用時間は？
- 問4 人と話しをするのが苦手か？
- 問5 早口か？
- 問6 声大きいのか？
- 問7 声が良いか？
- 問8 聞き返されることが多いか？
- 問9 発音がうまくいかないことがあるか？

発話のしにくさの自覚と性別，文/理

表4：問9に「ある」もしくは「どちらかといえばある」と回答した人の内訳 [%]

	文系	理系	全体
男性	26.3 %	37.6 %	35.5 %
女性	20.7 %	27.4 %	24.4 %
全体	22.7 %	34.7 %	30.6 %

発音がうまくいかないときの感覚や状態

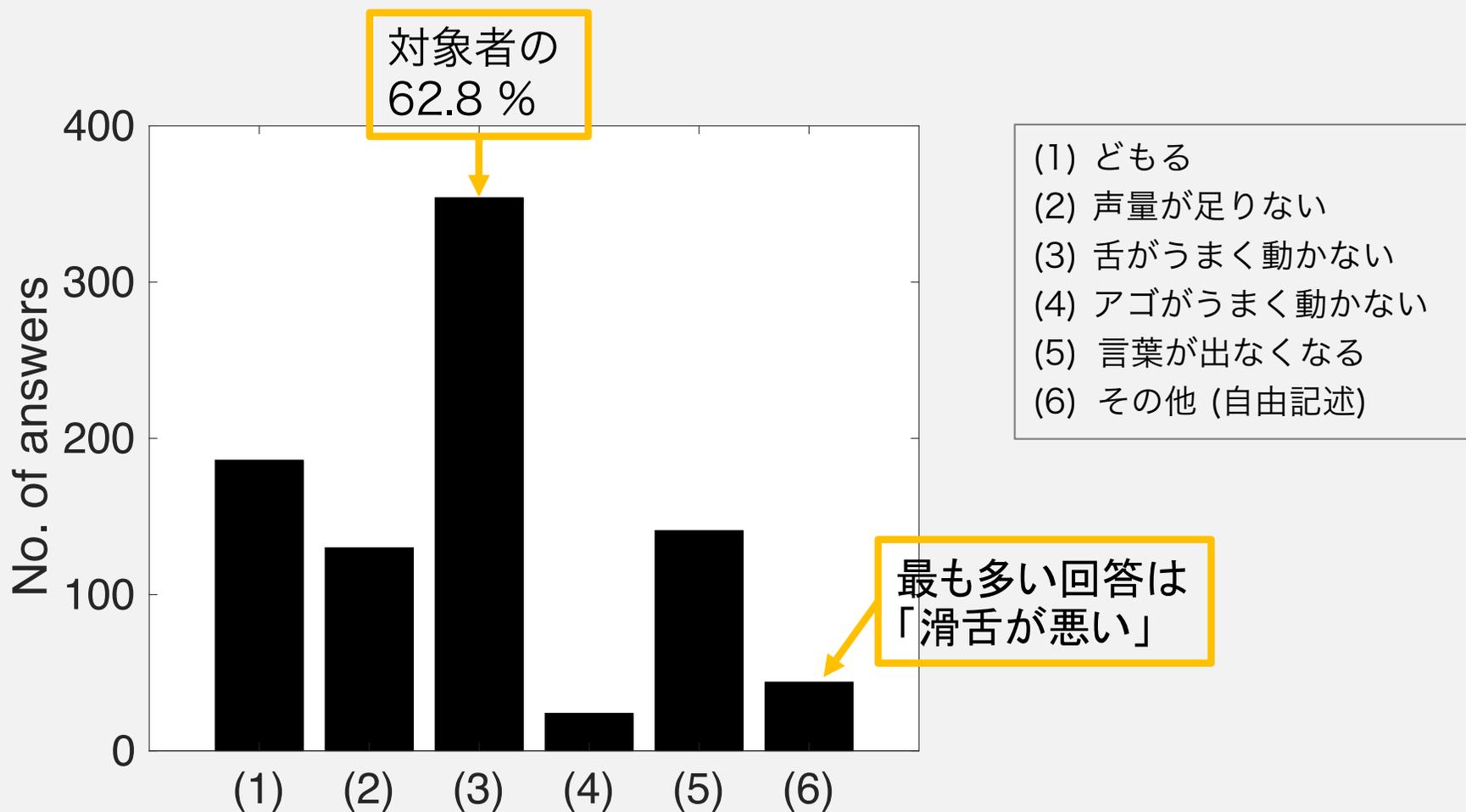
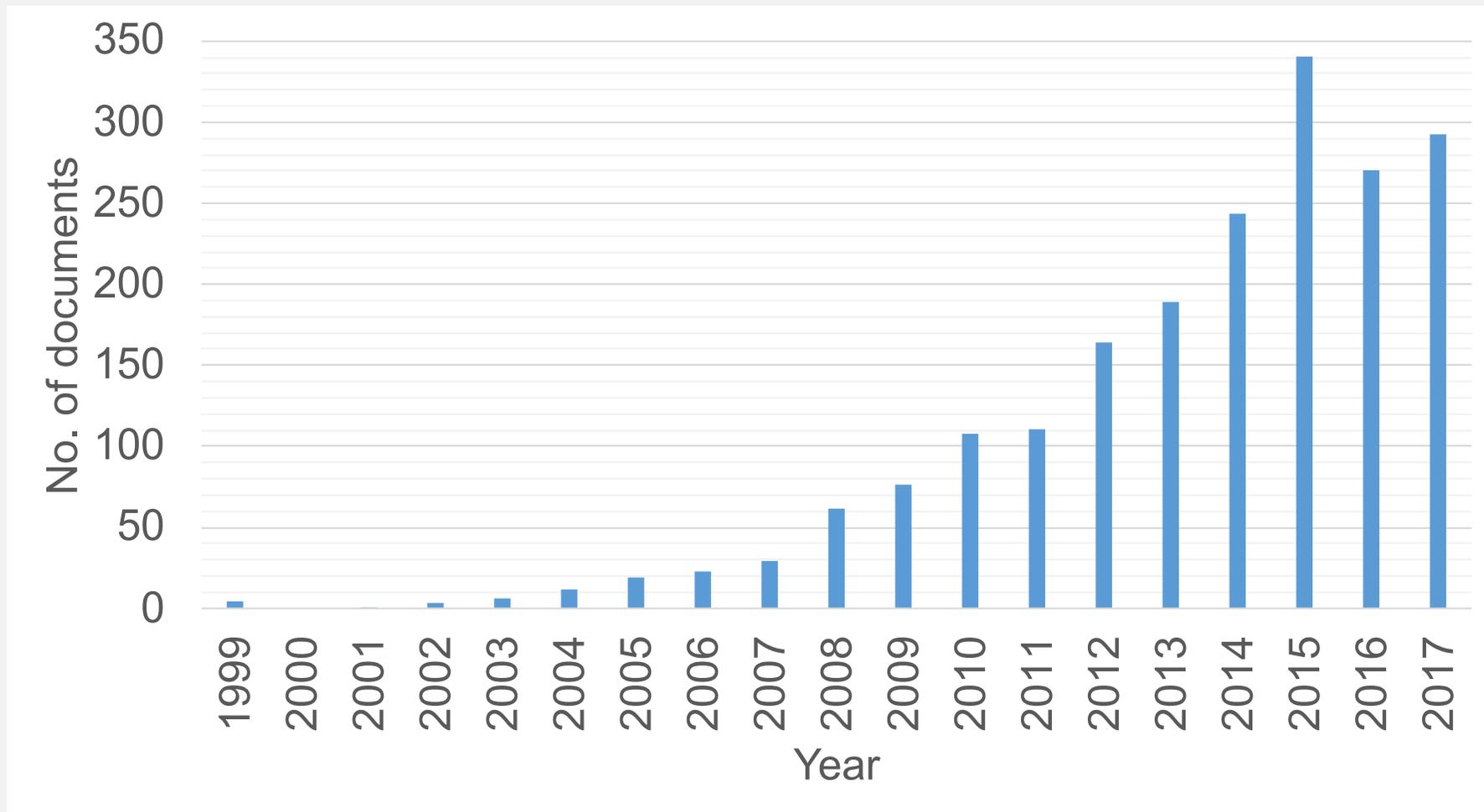


図2：問10の回答数 (複数選択可)

参考：「滑舌」の利用頻度の変化

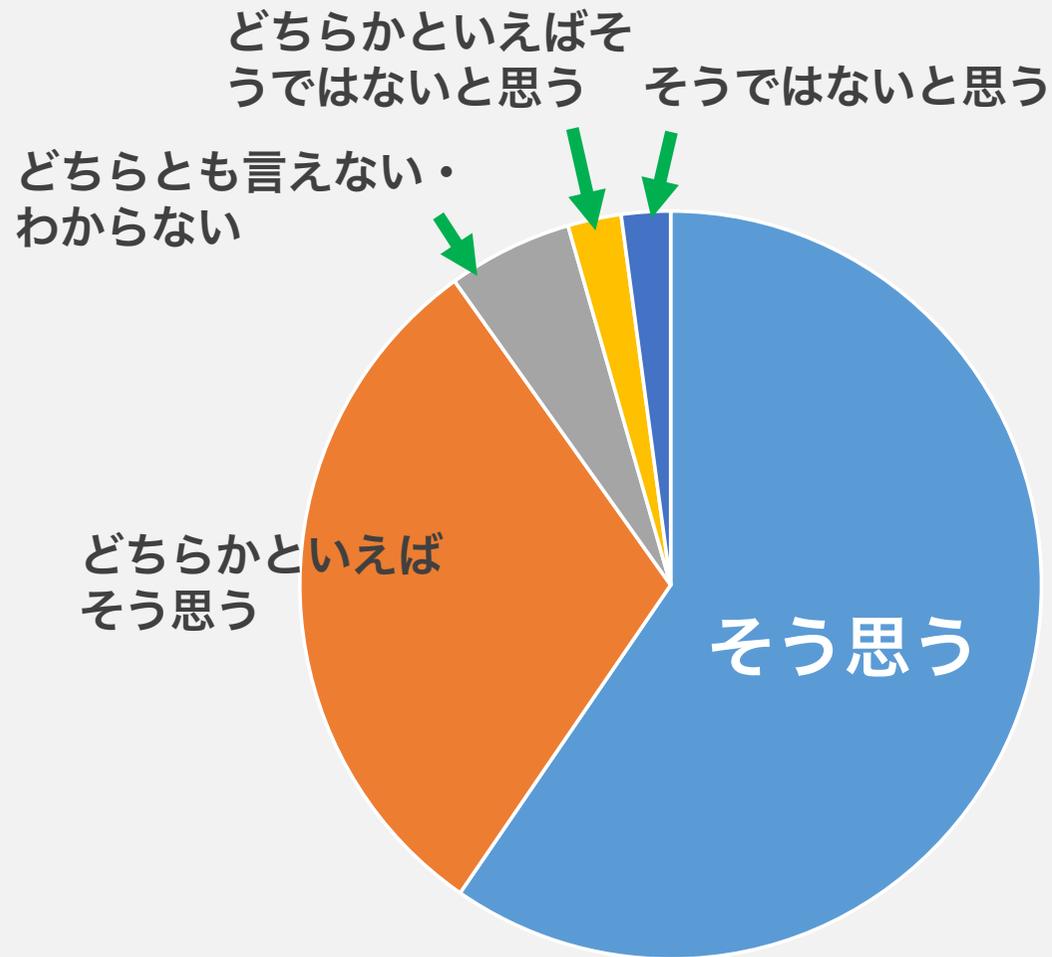


図：Factivaにて求めた「滑舌」の利用頻度変化 (対象：パブリケーション)

発音がうまくいかないと感じる単語・音

- 特定の単語や音があるか
 - ある：141名
 - ない：375名
- 具体的な単語や音
 - サ行：42名
 - ラ行：30名
 - カ行：19名
 - タ行：11名

発音を改善したいか



考察

考察(1/2)

- 発音がうまくいかないことが「ある」,
「どちらかといえばある」 : 31.0 %
 - 先行研究よりは低い
- 発話のしにくさの自覚と聞き返されることが多い自覚にはやや相関がある
 - 北村 (2014)を支持
- メールやSNSの利用時間との相関はない

考察(2/2)

- 発話のしにくさの自覚がある人は舌がうまく動かないと感じていることが多い
 - サ行, ラ行, カ行, タ行
 - 発話のしにくさの自覚がある人は舌運動速度が遅い (立川ら, 2015)

言語能力の性差

- 言語能力に性差はほとんどない[メタアナリシス] (Hyde & Linn, 1988)
- 発話時の下側頭回の活動が男性で大きい (Gauthier *et al.*, 2009)
- MtFを含めた調査では生得的性差が有意 (Soleman *et al.*, 2013)
- 脳梁の大きさは女性が大きい (Delacoste-Utamsing & Holloway, 1982)
 - ⇔ MRIによる調査ではほぼ性差なし (Wheeling, 2015)
- 吃音の男女比は4:1で男性に多い (国リハホームページ)

文系・理系の差

- 生得的特性か後天的特性か？
- 野津田ら (2015)
 - 対象：2010年度, 2011年度入学の大学1年生

まとめ

- 15大学の院生，学部生約2,000名を対象に発話のしにくさに関するアンケート調査を実施
- 31.0%が「発音がうまくいかないことがと感ずることが「ある」，「どちらかといえはある」と回答
 - 自らの声が聞き返されることが多いと感ずる傾向あり
 - 教育関係者はこの結果を認識する必要あり
- 発話のしにくさを改善する訓練法が必要

謝辞 本研究は平成29年度科研費（Nos. 16K13226, 16H01734）の支援により行われた。調査・集計にご協力いただいた各大学の教員，大学院生，大学生の皆様に深謝します。